早稲田大学大学院日本語教育研究科

２０１３年３月

博士学位申請論文審査報告書

論文題目：相互行為がもたらす声とことば
－書くことを学ぶ教室における省察的対話の意義－

申請者氏名：広瀬　和佳子

主査　細川　英雄　（大学院日本語教育研究科教授）
副査　小宮千鶴子　（大学院日本語教育研究科教授）
副査　宮崎　里司　（大学院日本語教育研究科教授）

【本論文の概要】

本研究は，第二言語で書くことを学ぶ教室がどのようにあるべきかを，日本語教師である筆者が自身の教育実践を分析・考察することで追究した実践研究である。

序章では，第二言語で書くことを段階的，選択的に学ばれる技能ととらえることを批判し，「ひとりの読み書き」から「相互行為としての読み書き」への移行をめざす本研究の立場を，バフチンの「対話」概念に依拠しつつ述べ，本研究が実践研究という枠組みを用いることを，その理論的背景とともに述べ，①学習者はどのように書いているのか，②書くことで何を学んでいるのかという，実践研究における二つの問いを提示している。

1 章では，書くことの教育がどのように行われてきたのか，プロダクト重視からプロセス重視への移行を経て，「ポストプロセス」と呼ばれる現在，さまざまな教育的アプローチが混在している状況を概観し，その中で，本研究がどこに位置づけられるのかを述べ，2 章～6 章は，四つの実践研究［研究 1］～［研究 4］の分析と考察である。

［研究 1］「読み手の解釈の多様性と添削の限界」では，相互行為として書くことを実践する教育とは異なる教育観に基づく添削指導について考察し，添削の限界として，自分が言いたいことを他者が代わって語ることはできないということを学習者自身が自覚し，自分を語るためのことばを獲得していく教室の実現であるという実践の方向性を示した。

［研究 2］「ピア・レスポンスが推敲作文に及ぼす影響」では，このような添削指導とは対照的な教育観・学習観に支えられているピア・レスポンスを自身の授業で実践し，推敲作文への影響を分析している。

［研究 3］相互行為として書く過程は，［研究 2］の分析上の問題点を踏まえ，学習者が対話を経て書き直す過程に注目している。学習者が書く過程はこのような自己内対話を含めた読み手との対話であるととらえ，学習者 12 名の推敲過程を分析した。授業を履修した学習者のうち，希望者を対象に個別相談の場を授業時間外に設け，学習者がそこで授業課題を書き直す過程をデータとして収集した。学習者がパソコンに入力する画面をビデオ撮影し，教師との対話や学習者のひとりごとを録音したものを文字化し，ビデオ映像とともに分析した。グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いてカテゴリー生成を行い，現象理解のためのモデルを作成し，このような学習者の推敲過程をモデル化することで，［研究 1］の教師添削と［研究 2］のピア・レスポン

スの影響について考察している。

［研究 4］「教室での対話から生まれることば」では，［研究 3］の分析過程で，対話による内省の重要性が明らかになるにしたがい，授業デザインも変化するプロセスについて記述している。授業デザインの変化とともに，学習者は作文の内容について活発に議論するようになる様子が描かれ，個々のやりとりでは，質的に異なる側面が浮かび上がっている。論文では，6 名が受講するクラスを対象に，その異なりを発話の単声機能と対話機能の観点から分析し，教室での相互行為の実態を記述している。

7 章では上に示した四つの実践研究の総合考察を行っている。学習者はどのように書き，何を学んでいるのかという二つの問いを追究することは，対立する言語観・学習観の存在を浮かび上がらせ，そのあいだで葛藤する学習者と教師である筆者自身の姿を描くことにつながっている。ことばでコミュニケーションするということは，すでにそこにある言語体系という規範に従うことであると同時に，話し手と聞き手の相互作用によって意味を生じさせる行為でもあることを指摘している。

終章では，このような本研究の限界を認識したうえで，書くことの教育が向かうべき方向を巨視的にとらえるために，自身の実践の文脈からはあえて距離をおき，省察的対話が向かうべき変革とそれを可能にする実践研究の方向性を，書くことの教育をめぐる展望として述べている。書くことの学びをとらえる視座として以下の 3 点を提示した。

(1) 宛名をもつ声に根ざした自分のテーマの探究
(2) 他者とテーマを共有し，考え，評価し，行動するためのことば
(3) コミュニティにおける相互行為の意味づけ

【評価される点】

本研究の立場は，書くことは話すことと同様に，他者とのあいだで営まれる対話的コミュニケーション，つまり書き手と読み手の相互行為であり，書くことを学ぶ教室は，相互行為の過程で生じるさまざまな葛藤―言語的，対人的，制度的な対立や矛盾を学習者自身が意味づけていく場として機能すべきだとするものであり，本研究は自身のピア・レスポンスの授業実践に対する批判的検討を出発点としている点にオリジナリティがあるといえる。

とくに，日本語学習者に対する書くことの指導において従来から困難とされてきた

内容に関する推敲に関して,「相互行為として書く」という観点から自己の授業実践を批判的に見直し，学習者が互いの書いた文章を読み合って省察的対話を重ねることによって内容と表現が一体化した推敲を実現させる授業デザインを編み出し，有効な結果をえるに至るまでを記述した貴重な実践研究である。第二言語学習に正確さが求められることを否定せず，従来のピア・レスポンスの枠にとらわれず学習者に自己が求める対話のあり方を明示するなど，申請者の思考はしなやかで，日本語学習者が自らの言いたいことを見出しつつ書き表せるようになる指導法を開発した点にも意義がある。

理論的には,「書く」という言語行為を学ぶ教室での省察的対話の意義を明らかにし,「書き手」と「読み手」という役割が相互に往還することで，自己の中に他者を意識し，相互行為としての内的対話を誘発させる意義を論究したものである。筆者自身の 4 種類の日本語教育実践の検証ならびに考察を経ながら，プロダクト重視からプロセス重視という，書くことの認知モデルと推敲ストラテジーを検証し，さらには，ポストプロセスへと移行しつつあるライティング教育を概観し，教室での葛藤から生まれる内省を伴う対話が第二言語を学ぶ学習者にとって重要であると結論づけ，省察的対話の意義を提唱している。学習者の作文に対する解釈の多様性のため，教師の添削過程には限界がある。対話による内省を促すことで，主張が明確化していき，はじめて，情報として伝達される。教室は，書くことを支える場，言語的・社会的・分析的・省察的足場かけを創出する機能をもたせるべきで，そのためには，他者のことばの対話的理解と自分のことばの獲得が不可欠であるという主張，加えて，第二言語学習者の推敲過程は，他者への応答を通して，はじめて深まっていくという論旨は，今後の作文教育への具体的な提言であると読み取れる。

書くことを学ぶ教室は, 相互行為の過程で生じるさまざまな葛藤―言語的, 対人的, 制度的な対立や矛盾を学習者自身が意味づけ，それによって自分自身や自分を取り巻く状況を変えていけるという可能性を実感できる場となるべきだとする主張は，書く活動に新しい展望を拓く視点であると評価できる。

【今後の課題】

１　理論的フレームワークを構築する上で，バフチンの「対話」と「理解」という概念を，他者のことばの対話的理解と自らのことばの獲得と捉え，フレイレの説く，単

なる機能的リテラシーとは異なる，新たなリテラシー教育のあり方を支持している。ただし，バフチンもフレイレも，言語教育の中で理論構築を試みた思想家ではないため，ややもすると，その理念の上澄みを掬う危険性もある。また，学習者の中に，自己と他者を意識化させることで相互行為としての内的対話を誘発させる意義を主張する筆者の論点は,「社会や文化的文脈の中で自己と他者がたがいに関わり合うことによって認知機能が発達する」とする社会的構成主義や,「知識は主体自らが行動を起こすことによって，主体の中に構成される」とする，ピアジェを代表とする発生的認識論との類似性や異なりを明らかにしてほしかった。より具体的には，人間の「高次精神機能」は，社会的なもの・外的なものが個人内に「内化」されて形成されると主張し，個人の中にある経験や知識を基に社会と関わることで，学びが成立すると考える社会構成主義の学習観をもつヴィゴツキーの理論と，どのように異なるのかについても，言及する必要がある。

２　本研究は，日本語教育という研究・実践領域に限定しないという認識を有していたようだが，そのためにも，省察的対話の重要性を，母語話者のライティング教育への提言にも広げた試みを展開してほしい。それが，今後の発展研究の課題ともなり，また，日本語学習者や日本語教師以外への発信にもつながると考えられる。

３　研究３と研究４は，新聞に投書する 500 字程度の意見文を書かせる課題について推敲の過程や対話から生まれることばをデータとして考察しているが，内容づくりの問題に気づけない，本当に言いたいことを日本語で表せないという問題は，意見文という課題との関係も考慮にいれる必要があろう。意見文以外にも課題文のジャンルを広げ，どのような省察的対話が生じるかを記述することも重要であろう。また，本研究のデータは中級学習者のものだが，申請者は初級学習に対しても省察的対話による書くことの学習が可能と考えているようなので，初級の授業の進め方についても述べてもらいたい。

４　実践研究とは，本来，社会変革をめざして構想された分野である。学習者が教室で獲得したことばを，教室コミュニティを超えて他のコミュニティとの関係において意味づけていくことが必要なように，本研究も他の実践者，他のコミュニティとの相互作用によって，実践研究としてのさらなる発展をめざす必要があるだろう。変革の対象を，教室という枠組みから，教室を取り巻く社会的状況・制度といったより大きな枠組みへ向けていくために，実践の改善を閉じられた教室だけのものとしない実践

研究のあり方を模索することが求められよう。

以上，さらに考察されるべき今後の課題は残されているとしても，本論文は，優れた学術研究として高く評価することができる。よって，本論文をもって日本語教育学の博士学位論文に値するものと判断できる。